一度発生すると広がりやすい うどんこ病を、しっかり予防できる。アフェットは定番の薬剤です。

栃木県栃木市
和田 宗一さん

【プロフィール】
奥様、ご長女夫婦とともに、いちご55a（とちおとめ、スカイベリーなど）を経営。栃木県農業士としても活躍中。

奥様、ご長女夫妻と家族経営で収益アップをめざす（写真左は義理の息子さん、中央は奥様）。

取材時の9月、本圃への定植が進んでいた。

いちごでは、健全な苗を作ることが何より大事

ブランドいちご「とちおとめ」の主産地である栃木県で、和田さんはご長女夫婦と家族経営を展開。県内で教師をされていた和田さんのご長女は、ご結婚後、夫婦で就農され、一家4人でいちご栽培に精を出していらっしゃいます。

定植で用意する苗は、55aのいちごで予備も含めると合計5万本にも及ぶのだとか。栃木県はいちご栽培に適した穏やかな気候に恵まれながらも、近年の温暖化で高温多湿な時期が増え、病害虫発生時期が長期化しているそうです。重要病害虫はうどんこ病、炭疽病、萎黄病、アザミウマやハダニなど。高品質ないちご栽培のポイントについて、和田さんに伺いました。

「いちごは親株からランナーを取り、育苗したあとに定植します。種ではないので、苗で失敗すると、定植できず取り返しがつかない。苗の段階でしっかりと防除をして、病気を本圃に持ち込まないことが大事です。育苗期から収穫期に入るまでは、4～5日おきに薬剤を散布し、病気を出さないように常に気を配っています」。全部で55aあるハウスを毎日1棟ずつ散布することになり、とても大変な作業です。

「それから、ハウスごとに異なる土壌に合わせた施肥設計と水管理に気を付けています。例えば、灰色かび病は、多湿になると病気がでやすいので、冬場のハウス内の温・湿度管理は特に重要で、病気を出さないように適切な換気が必要ですね」。

和田さんのいちご農園では、年内から翌年5月中旬まで収穫が行われています。「7ヶ月間も収穫しているから、病気をださない管理は大変」と奥様。

全体の半分ほどの面積は、夜冷育苗を取り入れ、通常より1ヵ月早い11月上旬からの早期出荷が行われているそうです。作期分散と早期出荷による有利販売につながる夜冷育苗ですが、この夜冷育苗時期の防除はとりわけ大事、と和田さんは言います。

9月から10月の散布を徹底し、収穫期にうどんこ病を出さないように

「夜冷育苗は8月上旬から9月上旬の育苗期間、夜間にエアコンで冷やして花芽を早く着けさせるんですが、10月ごろまでは外気温が高く過繁茂になりやすいのでので、うどんこ病が多発しやすい。うどんこ病はいったん発生するとハウスの中で一気に広がるので要注意なんです」。

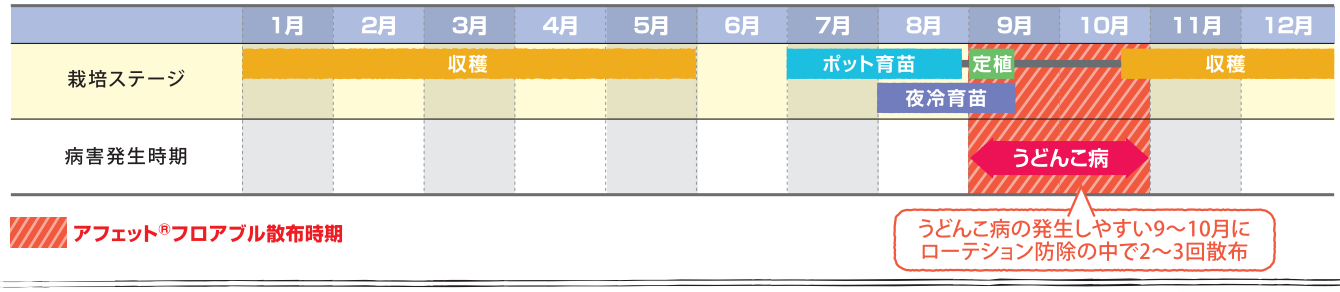
和田さんがアフェットフロアブルを導入したのは5年ほど前。現在は、うどんこ病の重点防除期間である9月から10月の間にローテーション防除の中で2～3回、散布していらっしゃいます。

「アフェットを予防剤として使い始めてからは、うどんこ病はしっかり抑えられてますね。定植後、9～10月の防除を徹底することで、収穫期間中は防除の回数が抑えられます。11月上旬～2月上旬までは基本的に無防除。2月中旬から5月までは10日に1回程度の散布で病気を抑えられています。桜が咲く頃になると、雨がしとしと降ることがあり、灰色かび病も発生しやすくなるけど、アフェットはうどんこ病、灰色かび病にも登録があり、1剤で済みますね」。

また、アフェットは、「汚れがつきにくいのも便利。殺菌剤の中には果実に白い汚れが残る剤もありますから」とその使い勝手にもご満足のようでした。

《産地情報》
いちごでよく知られる栃木県の中でも、冬でも長い日照時間、寒暖差の大きい気候など、いちごの栽培に適した栃木市は、「とちおとめ」をはじめ、有名な数々の品種を生み出した土地でもあり、「いちごのふるさと」とも呼ばれています。

和田さんのアフェット®フロアブルの使い方



アフェットを取り入れた防除体系はうどんこ病をしっかり抑えます。

静岡県静岡市
海野 保さん

【プロフィール】
JAで営農指導に携わった後、代々いちご農家を営む実家「やまさん農園」に6年前に本格的に就農。現在石垣いちご（紅ほっぺ、章姫、おいCベリー）を30a、株数にして約3万本を栽培。

斜面に広がる「石垣いちご」の栽培ハウス。
平地より日照に恵まれる。

いちご狩りの時期には多くの観光客でにぎわう。

120年前から変わらない「石垣栽培」を継承

徳川家康を祭る久能山東照宮でも有名な静岡市南部の久野地区は、温暖な気候に恵まれたいちごの産地でもあります。特筆すべきなのはその栽培方法。山の麓の傾斜地にコンクリート板を積み上げ、鋸歯状の切り込みにいちご苗を植えて育てる「石垣栽培」です。太陽光と海面からの放射熱で温められた石垣は、保温性に優れ、夜間も根が冷やされることがなく、いちごが元気よく育ちます。

この「石垣いちご」は120年の歴史を持ち、日本でもここだけで引き継がれている伝統的な農業技術です。「石垣栽培でできるいちごは糖度が高く甘いいちごが育つんです。石垣が土を温め、水が溜まりにくく保水性を維持し、土壌微生物が活発化。施設がなかった時代の知恵が結集された技術です」。

この地で代々「石垣いちご」の栽培に携わる実家に海野さんが就農したのは6年前。それまでは農協職員として働いていましたが、いちごの栽培農家が年々減っていることに危機感を覚えました。「この歴史ある石垣いちごを守りたい」という気持ちが大きくなり、本格的に就農することを決めます。「時代は高設栽培等、省力化が進んでいますが、変わらない栽培方法にこだわっていきたい」と海野さんは話します。

うどんこ病への高い効果とローテーションの幅の広がりに満足

いちご栽培で気をつけていることを伺うと、真っ先に「病害防除」と言う海野さん。特にうどんこ病には細心の注意を払っているると話します。「うどんこ病は一度被害が拡大するといくら防除しても止まらない。薬剤散布してもうどんこ病が、大きくなった葉と葉の間に残ったりするとそこからまた広がって…。収穫がはじまると農薬の散布回数や収穫前日数等で、防除できる場面が限られてしまう。だから、とにかくうどんこ病を本圃に持ち込まないことが重要だね」。

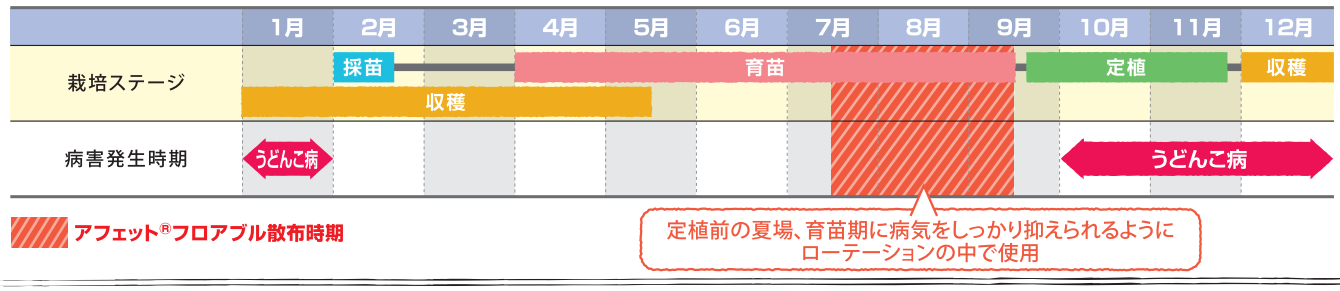
管内にアフェットを導入したのは海野さんが営農指導員だった時のこと。「うどんこ病への効果は高いですね。アフェットはそれまでの薬剤とは異なる系統だったので、ローテーションの幅も広がり助かりました」。7月から9月の定植までうどんこ病対策としてアフェットはローテーションの要となっています。

「予防を徹底しているので、今はうどんこ病はほとんど出ないです」。また、病気にならないよう施肥管理にも気を配り、生育状況の観察を欠かしません。

産地の魅力を伝えこれからは販売活動にも注力

就農当初10aだった栽培面積は、周りの土地を集積して規模拡大を進め、現在は30aになります。「明治から続く歴史ある「石垣いちご」のブランド力を高めるためにもっと情報発信に力を入れていきたい」と海野さん。

静岡市の国道150号、通称「いちご海岸通り」では、例年1月から5月まで国内外からのいちご狩りの観光客でにぎわいます。「畑で完熟したいちごは、一味違った味わい、摘んだ直後の「石垣いちご」を是非食べに来てください」。産地の魅力をもっと知ってもらいたい、そんな強い気持を感じさせる海野さんの言葉でした。

《産地情報》
駿河湾沖を流れる黒潮が運んでくる南国の風と、久能山の斜面を利用した豊富な日射量、さらに保温性の高い石を利用することで、糖度の高いいちごをシーズンを通して栽培できます。

海野さんのアフェット®フロアブルの使い方